

明快な文章 阿部 紘久

おしゃべりはできても、文章は書けないと考えている人が多いのはなぜでしょうか。それは多分、文章にするほど立派なことは考えていないと思っているか、文章を書くのは下手だから無理だと思っているか、下手な文章を書いたら恥ずかしいと思っているか、あるいは書く習慣がないので最初から書くことなど思いつかない、などの理由によるのではないのでしょうか。何らかの理由で、自分の考えや感情をまとめた文章で表現することに思いが及ばないため、気の合った友人とおしゃべりするか、スポーツ、テレビ、音楽、映画や、ダンス、カラオケ、酒、パチンコなどで発散して、それで終わっている人が多いのだと思います。

私は、友人とおしゃべりやスポーツ、酒などでストレスを解消し、何もかも忘れてその時その時を楽しく過ごすのも一つの生き方だと思いますが、考えていること、感じていることと素直に向き合って、それを自分にも他人にも分かる形で表現し、それを積み上げて行くのも、人間ならではの面白い生き方だと思います。

「文章力の七つの要素」

- (1) 良いテーマを見つける。(着想力)
- (2) テーマに関わるさまざまな事象に連想を広げる。(連想力)
- (3) テーマに関わる事象の中で、重要なものと、そうでないものを峻別する。(重要度、優先順位の判断力)
- (4) 書くべき重要な事象を、構造的に把握する。(原因と結果、理由と結論、重要度、時系列、地理的關係などにしたがって、全体を系統的に理解する力)
- (5) 事実を踏まえた上で、自分独自の考えを組み立てる。(創造性、独自性)
- (6) 読み手の立場、心情、知識レベルなどを理解する。(人間理解力)
- (7) 言わんとすることを、読み手に伝わる簡潔・明瞭な言葉で表現する。(言語表現力)

<読点をつける>

私もこの人のような人に喜びと希望を与える大人になりたいと思いました。…どこで切れるかわからない

私もこの人のような人に、喜びと希望を与える大人になりたいと思いました。
私もこの人のような、人に喜びと希望を与える大人になりたいと思いました。

不要な言葉を削り、短い表現にすることで鮮明になる。

そもそも文章というものは、書き手が一生懸命あれもこれもと文字を連ねても、そのすべてが読み手に伝わるという保証は全くありません。読み手にとって理解しやすく、かつ関心を持てる部分、共感できる部分だけが伝わるのです。

<走馬灯のような表現は使わない>

「走馬灯」を滅多に見かけることがありません。還暦を過ぎた人でもおぼろげな形しか思い浮かべられないでしょう。この表現を最初に思いついた人は鼻高々だったと思います。新鮮で分かりやすく、大いに受けたことでしょう。しかし、現在の人びとは、実感を込めてこの言葉を使っているのではなく、単に定型的な表現として使っているのではないのでしょうか。書く方が実感を込められなければ、読む方も当然実感がこもりません。何か空々しささえ感じてしまいます。実感のこもらない、他人の言葉で書くのはやめましょう。

<陳腐な決まり切った表現>

「一面の銀世界」「黒山の人だかり」「芋の子を洗うような混雑」「うれしい悲鳴」「苦虫をかみつぶしたような顔」「吐き捨てるように言う」「幕が切って落とされる」「衝撃が日本列島を走り抜ける」などの常套句